

安全な国産グリーン社会

SDGS Safety Domestic Green Society

第24回

グリーン社会の本質②

―茨木のり子の『六月』から読み解く

一般社団法人 洸楓座 代表理事 佐藤建吉

はじめに

持続可能な社会の実現は、い多くの立場や分野で叫ばれている。そのために合言葉とされているのが、「グリーン社会」であるといえる。今回は、グリーン社会の本質と題しての2回目。筆者の視点から述べたい。

環境と状況

筆者は、「環境」という言葉の意味について再考し、「環境とは、主体者の周りの自然や人工の生態条件を指す」とした。これによれば、「環境」には、主体者を含んでいない（図参照）。したがって「環境問題の解決」などと言っても、自分自身を含めないと叫んでいるだけでは解決されない。

▼茨木のり子の『六月』

筆者は、いまは故人となった詩人・茨木のり子（1926～2006）の詩と詩情を広めるために朗読と音楽の会を2019年から毎年開催している。彼女の詩は、日常の暮らしにおける個人や社会、あるいは人々のあるべき状況を、的確に遠慮なく、かつ詩的に表現している。それは未来の

照。環境問題に主体者自身が仕切りや裁量をもつて行動することになる。

このとき一つ、上げ足を取る指摘としては、「腸内環境」というのが

ある。実は、腸内は主体者の中にあるからである。したがって、この言葉においては、環境と言つても状況と同じで主体者を含んでいるとしなければならぬ（笑）。

六月

茨木のり子

どこかに美しい村はないか
一日の仕事の終りには一杯の黒麦酒
鉢を立てかけ 籠を置き
男も女も大きなジョッキをかたむける

どこかに美しい街はないか
食べられる実をつけた街路樹が
どこまでも続き すみれいろした夕暮は
若者のやさしいささめきで満ち満ちる
どこかに美しい人と人との力はないか
同じ時代をともに生きる
ししたときとおかしさそうして怒りが
鋭い力となって たちあらわれる

感受性くわい『怒るときと許すとき』『わたしが一番きれいだったとき』『四海波静』などがある。

今日でも、戦争や紛争があり、殺戮が行われている。したがって、「平和」については、多くの人が関心を持っている。平和を求めること、「和平」には、個人の意思の集積が重要であるといえる。

茨木のり子の詩に、『六月』がある。この詩は、後述するように、グリーン社会の構築のための内容であるといえる。すなわち、現代の社会においても重要な気付きを与えてくれるからである。

『六月』の内容は、カレンダーの6月とは、必ずしも一致しない。1960年と70年の安保闘争時代をともに生きる」を

掲げ、いまの時代を共生する人々の活力を表現している。

その後に「怒りが力となつてたちあらわれる」と、動きを望み期待している。じつは第1連、第2連でも、「かたむける、満ち満ちる」と、動きを述べている。

この12行の短い詩において日常や現状について述べ、それを肯定し、しかしより高いあるべき状況や社会を期待している。そしてその求めるものは共通して「美しい」対象なのであった。季節感としても、6月は緑豊かで美しい。が、ただのひと月の6月ではなく、その前後の生長期を含んだ季節感でもある。

これこそが、「グリーン社会」の動景とは言えないだろうか。美しい村はエコ・ヴィレッジ、美しい街はエコ・タウン、美しい人と人はエコ・コミュニティに深化させる。

すなわち、この詩は、GS（グリーン社会）の形成を、いみじくも茨木のり子が60年も前に、着眼し今の時代に残した遺産と言ふのである。

▼持続可能性とまとめ

「ネジメントの父」として著名なピーター・ドラッカー（1905～2005）は「選択と集中」を推奨したが、これも持続可能なための一手

法である。組織は社会の多様である。一日々々、要求に次々。社会と組織の相補性や協働性を確かにすることであった。時代にあつた事業や手法で、社会貢献をして持続可能を確かにするという戦略を説いた。

持続可能性の意味合いにもいろいろある。世代を超えて事業継承する例として、次のようなこともある。19代続くある酒造は、初代から同じ酒業を継続し、時代の変革に適合させ看板を守つてきた。350年続くある商家は、代々が取扱商品や事業内容を替えて生き残り、「〇〇商店」の屋号を名乗り続けている。

いま対象とされているのは、組織や法人企業、コミュニティや国家など組織の形態はさまざまであるが、共通して、それに関わるステークホルダー（利害関係者）の協働した持続可能性である。その手法や判断は、先例の酒造や商家のように、

多様である。一日々々、今日と明日という短期間の継承もあれば、一年々々や年度と年次での継承もある。いずれにしても代々の歴史的継承も成し得ることがある。

まとめとしては、持続可能性を確かにするためには、主体者として時代の変革に対応した自己改革が必要であり、それには時代を読み解くことも必要である。そのための合理的な視点は、前回でも触れたEを持つ4つのキーワードでの対応である。これこそが、GS「グリーン社会」の構築につながる。

(一)Ecology / Environment

(二)Economy / Employment

(三)Empathy / Education

(四)Eco-ethica / Equality

(五)Eco-ethica / Equality

(六)Eco-ethica / Equality

(七)Eco-ethica / Equality

(八)Eco-ethica / Equality

(九)Eco-ethica / Equality

(十)Eco-ethica / Equality

(十一)Eco-ethica / Equality

(十二)Eco-ethica / Equality

(十三)Eco-ethica / Equality

(十四)Eco-ethica / Equality

(十五)Eco-ethica / Equality

(十六)Eco-ethica / Equality

(十七)Eco-ethica / Equality

(十八)Eco-ethica / Equality

(十九)Eco-ethica / Equality

(二十)Eco-ethica / Equality

(二十一)Eco-ethica / Equality

(二十二)Eco-ethica / Equality

(二十三)Eco-ethica / Equality

(二十四)Eco-ethica / Equality

(二十五)Eco-ethica / Equality

(二十六)Eco-ethica / Equality

(二十七)Eco-ethica / Equality

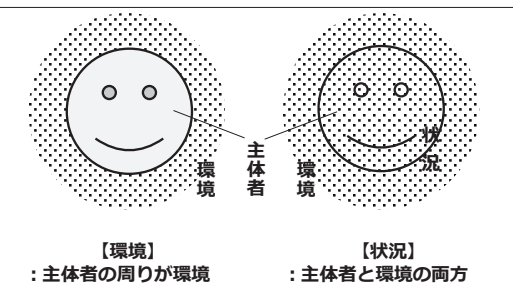
(二十八)Eco-ethica / Equality

(二十九)Eco-ethica / Equality

(三十)Eco-ethica / Equality

(三十一)Eco-ethica / Equality

(三十二)Eco-ethica / Equality



【環境】：主体者の周りが環境
【状況】：主体者と環境の両方

時代的にはちょっと古くなったが「禁煙運動」を例にすると、喫煙は環境や健康に良くないので、「喫煙には注意しよう」と唱えても、自身は喫煙しているようなもので、これでは運動は進まない。

そこで、筆者は、主体者とその周りの環境を含めた用語として、「状況」という言葉を当てはめることにした（図参